

延慶本『平家物語』と紀州地域

大橋直義／日本中世文学・文献学(和歌山大学 教育学部)

延慶本『平家物語』 数多ある『平家物語』諸本の中でも、とりわけ光彩を放つ一本がある。延慶二・三年[1309~10]本奥

書、応永二十六・七年[1419~20]書写奥書を有する延慶本である。現在、大東急記念文庫に重要文化財として蔵さ

れるこの六巻十二帖本は、水原一『延慶本平家物語論考』（加藤中道館、1979）による検証以後、いわゆる「平家物語古態論」の中心であり続けてきた、研究史上、最重要の一本である。現在の研究水準では、その当時に考えられてきた程には鎌倉後期頃の本文を伝えているとは言えず、現存本が書写された応永年間頃の再編を被っていることが明らかである。しかし、それでもその文学史的価値はいささかも揺らぐものではなく、中世文学研究および日本語学に果たす役割はもちろん、歴史学を始めとした隣接分野においても重要な位置を占めている。それゆえ、幾度となく影印版・活字版が刊行され、昨年2019年3月には、延慶本平家物語注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』全12巻が完結した（汲古書院。現在、論考・注釈補訂を集成した「別巻」を準備中）。

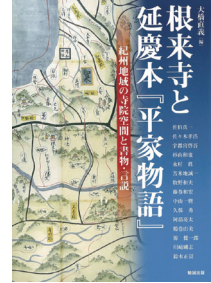


根来寺 大塔(左)と大伝法堂[2017年 稿者撮影]

しかのみならず、紀伊半島の地域史にとって極めて重要なことは、延慶書写・応永書写のいずれの段階においても、根来寺（岩出市）において書写されたことが明らかな点である。周知のように、新義真言教学の根本道場である根来寺は、天正十三年[1585]三月、本堂・大塔等の主要伽藍を残して灰燼に帰した。その中にあって、幸いにも延慶本は、それ以前に寺外（おそらくは室町殿）にもたらされ、難を逃れたのである。

根来寺研究 延慶本の本文には、他本には見られない特異な一面をかいま見ることができる。牧野和夫は「延慶本「平家物語」の一側面」（『藝文研究』36, 1977。『延慶本「平家物語」の説話と学問』思文閣出版、2005再録）以後、根来寺と高野山大伝法院とをとりまく人的ネットワークの中に延慶本テキストの生成を見、その生成環境は、中川委紀子・宇都宮啓吾・三好英樹ら始めとした美術史学・日本語学・歴史学からの成果によって、広くかつ稠密に見わたされ続けている。根来寺は、日本中世を理解する上で重要な学術的結節点なのである。その近年における成果として、たとえば2013年12月に和歌山大学で開催された説話文学学会シンポジウム「（根来寺）の輪郭—空間・資料・人—」での一連の論考（『説話文学研究』50, 2015）を始め、海津一郎編『中世都市根来寺と紀州惣国』（同成社、2013）、大橋直義編『根来寺と延慶本「平家物語」—紀州地域の寺院空間と書物・言説—』（勉誠出版、

2017。右下図版）、山岸常人編『歴史のなかの根来寺—教学継承と聖俗連環の場—』（勉誠出版、2017）等の学術書が相次いで刊行されている。永村眞「中世根来寺の法儀と聖教」（『中世文学』63, 2018）、三好英樹「中世後期根来寺内における修験道」（『智山学报』60, 2011）を始めPDFファイルとしてウェブ公開されている関連論考も多いが、中川委紀子『根来寺を解く—密教文化伝承の実像—』（朝日選書、2014）を初学者がまず参照すべき基本書籍として紹介しておきたい。



粉河寺と葛城修験 延慶本「平家物語」における独自記事の中でもとりわけ注意を払いたいのが第五末（第十帖）・十五「惟盛粉河へ詣給事」である。屋島内裏を落ちた平維盛が高野山から熊野へ向かう途上、粉河寺に立ち寄り、寺内を巡礼したとする独自説話である。先年、この記事に関連しうる資料として粉河寺御池坊蔵『粉河寺御池海岸院本尊縁起絵巻』二巻二軸（18世紀）写。『紀州経済史文化史研究所紀要』39, 2018）を紹介したが、その解題において粗々の見通しを示したように、南北朝期から15世紀初頭にかけての時期、御池坊が粉河寺の寺家執行・頭坊を独占的に継承し始めるに際して生じてきた言説が、現存延慶本（応永書写本）とこの絵巻に共通して示されている点、興味深いのである。なお、有田川町日光神社社頭を描いた「日光社参詣曼荼羅」は平維盛が境内を巡礼する様を描くという点で共通する。

延慶本「平家物語」と粉河寺との連なりを示すものとして、（鎌倉初期）写『諸山縁起』『転法輪山（字葛木峯）宿次第』がある。そこには、「石曳 瀧院」と根来寺の前身である覚鑿再建「豊福寺」とが連続して示され、そしてその「葛城二十八宿」の道は粉河寺へと連なるものと位置づけられる。この状況は、延慶本第六帖・延慶二年本奥書が「紀州那賀郡根来寺石曳院之内禅定院之住坊」を書写の場と明示していることと関わるのだが、これまでの研究史は、根来寺・石曳院と葛城修験との関わりを重く見過ぎて来はしなかったか。葛城二十八宿との関わりからすれば、「葛城の中台」として最も大きな位置を占める中津川行者堂（極楽寺）と粉河寺との連なり、そして粉河寺と興国寺さらには再興期の七宝瀧寺とを繋ぐ法燈派（と修験）のネットワークの解明が、また別の糸口になると思われるのである。